

# 春燈

2019 May

5月号



主宰の句

安立公彦

軟らかに日差しまとふや犬ふぐり

三月や齡ひとつを身にかさね

紅梅のくれなる燃ゆる震災忌  
(三月十一日)

春の月真砂女忌の海抱くかに

西行忌こころ正して書に向かふ



# 久保田万太郎の句

水戸街道にふるき茶屋旅籠にて

ごまよごし時雨るゝ箸になじみけり

『草の丈』昭和二十七年

先生は食通であり、名句を残されている。この句、当時の水戸街道沿いの松戸、馬橋あたりの夕景であろう。

茶屋旅籠、ごまよごし、時雨るゝ箸に、えもいわれぬわびしさが滲んでいる。先生の食の句は、どれも下町の色合いが濃い。ごまよごしは、東京下町、近隣の村で使われていたなじみ深い言葉である。この独特の言葉に、なつかしさを覚え選んだ一句である。

中村紀美子

# 久保田万太郎の句

## 南風みなみやゝつよし天皇誕生日

「流寓抄以後」昭和二十六年

團塊世代の者にとつては、四月二十九日生れの昭和天皇を身近に思い出す。戦後、象徴天皇とされた為、学校などの行事はなく子供にとつては嬉しい祝日であった。今では、すっかり見なくなった日の丸の国旗を掲げる家も多く、国旗が身近にあった時代でもあり、おりからの南風に翻る旗に、復興に向ける明るさと力強さが溢れ誕生日を祝う喜びの姿が感じられる。

豊谷ゆき江

# 燈下集



○ 西川保子

まつさらな近江の空や鷹一羽  
鳥帰るみささぎの空斜交ひに  
まぎれなく春の水なり掬ひけり  
音もなく河口満ちくる多喜一の忌  
春満月告ぐるひとなく寝まりけり

○ 佐藤信子

あたたかや抱かせてもらふ児の重み(曾孫)  
立雛のより添ふ影の淡きかな  
貝寄風や都恋しと詠みし歌  
母の忌や鳥影のさす春障子  
平成に名残の雨や柳の芽

○ 山内四郎

思ひつきり除夜の鐘その一つ撞く  
窓よりの春の日差しに目を瞑り  
さくら散りくる草の上水の上  
爪を孤むひとりの時や春の雷  
春愁や卒寿の齡身に重く

○ 片桐てい女

春立つや大きチェックの子の上着  
白魚の数の目を借り捜査網  
鷹は鳩に平和の使徒は鳩サブレー  
「春の大雪」と気象予報士しよぼくれて  
春の炉とて有耶無耶きららふ首座嬪座

○ 園部 路郷

天気図に拇印を捺して冬帝来  
ふるさとは空家ばかりや雪こんこん  
郵便夫腰までしづむ雪を来し  
八十路われ足腰軽く雪卸す  
雪降らぬ国にあくがれ雪と老ゆ

○ 石橋 邦子

徒然にかな書き散らす梅二月  
青饅や終日小糠雨降り  
春禽のこゑ澄みわたる牛久沼  
水戸街道薬踏まれたる落椿  
あたたかや坂の途中の種物屋

○ 河本由紀子

下校時の子らの声より春来る  
病む夫と金剛婚の二月かな  
をのこばかり育てし母の雛祭  
雛を詠み雛のその夜に逝き給ふ  
決めかぬる心の揺れや水草生ふ

○ 永井 恵子

幼くてむらさき濃ゆき路の臺  
猫柳ささやくごとく川流る  
落椿打ち返しある畠にも  
平成の果てを見てゐる古雛  
ゆく春や使ふ当てなきパスポート

○ 荒井ハルエ

皇后の水仙根付く地震の地よ  
立春の日差しにゆるぶ十指かな  
踏みしむる試歩の一步やクロッカス  
荒行の固き門梅ふふむ  
春風やこんぺい糖の量り売り

○ 石田 康明

春遅々とはや一年の兜太の忌  
遠近の谷戸に春告鳥のこゑ  
砂利蹴つて鷗と遊ぶ春の浜  
次々と舞ひ込む良縁春の夢  
観覧車いま天辺に春薄暮

○ 宮崎 洋

眉引いて高校三年生の春

犬ねむる土へあはゆき降りかかる

遅き日やもの抓みつつ厨ごと

吹けば吹くほどにまぶしき春疾風

菜の花や真砂女の里は潮伝ひ

○ 持田 信子

点滴の音なく落つる寒の明け

梅が香や変体仮名の道しるべ

腹立ちば二月の海へ捨てにけり

如月の風やはらかし段葛

夏蜜柑届く無骨な漢文字

○ 平沢 恵子

想ひそつと聞かする少女クロッカス

梅林を黙して指の触れにけり

紅梅やひとつひとつの結び籤

何鳥か影散らしたる春障子

利休忌の墨絵のすは糸刃めく

○ 中里 よし子

春寒料峭野鍛冶鋸鍛冶廃れけり

夫亡くも屋号で呼ばるあたたかし

五代目もあきんどでよし名草の芽

赤き実を啄む鳥や春は遅々

白酒に酔ひ雛の夜の父の膝

○ 木村 みどり

梅ふふむ円空仏にチヨコレート

鶯や梅干粥と玉子焼

味噌豆煮る母の教への如くして

アカペラで唄ふシャンソンミモザ咲く

余寒なほ待合室の情報板

○ 大西 由美子

捨て舟に残る淡雪神田川

春の雪商店街のがらんどろ

自販機の釣銭こぼす余寒かな

啓蟄のハチ公前に逸れけり(渋谷駅 句)

亀鳴くや通路に残る線路跡

# 余言

安立公彦

鳥帰るみささぎの空斜交ひに

西川 保子

「みささぎ(陵)」は、天皇、皇后、皇太后、太皇太后の墓所。まず考えられるのは、大和橿原の神宮だ。天香具山耳成山、畝傍山という大和三山に守られ、更に、飛鳥路の田園風景、神苑の風物が、歴史の形跡を今に止める。

今、その「みささぎの空」を、渡り鳥が北方の地に帰っている。雁の一群か。陵の空を「斜交ひに」去りゆく姿には、現代では珍しい古典的な思いが感じられる。まさに、「歴史の形跡」を見るようだ。格調の高い句だ。

調律師来てゐる窓の辛夷かな

中野あぐり

愛用のピアノの音程が狂い、今日は調律師に来て貰っている。作者の家は敷地が広いので、ピアノの音が近所に響

くことはない。それでも一応窓は閉めてある。やがて調律師も終え、調律師に促されてピアノの鍵盤を打つ作者。ふと脇の窓を見て、小さな驚きの声を上げる。その窓に、今、辛夷の花が大きな花弁を開いているのだ。ピアノを忘れ、しばしその辛夷に見入る作者。春もなかばの伸びらかな風情の感じられる作品である。

見番に昼の灯ともる一の午

木村 傘休

「初午」は二月初めの午の日(陰暦二月もある)の、稲荷神社や稲荷の祠の祭礼を言う。もともと、春の農事の前に豊年を祈る祭りだった。京都の伏見稲荷大社の神が降臨した日である。地方に行くときでも良く見かける屋敷神の数は数百万とも言われている。初午は稲荷信仰を元とし、狐を稲荷の神の使いとする俗信から始まるとある。

「見番」は芸妓の店。この句、「一の午」の雰囲気良く表している。「見番の昼の灯ともる」に、その地域に残る伸びやかな稲荷信仰への思いが感じられる。

小分けして売らるる屋敷梅二月

太田 慶子

「屋敷」と言っても、門構えの立派な邸宅から、普通に見られる戸建住宅までさまざまある。この句の場合は、或る程度の広い庭のある住宅か。解体の終わった敷地は整地の後数区画に分けられ、分譲の幟が立っている。



このような景は良く見る。私の住む地域にも幾つかの例を見る。良く知られた作家の住居跡に、いつの間にか二戸の住宅が建っているのを最近見た。この句、まさに現代の世相を写している。跡地に残った梅が来し方を語る。

山径の膝の笑ひや山笑ふ 林 紀夫

「膝」には幾つかの語義がある。膝を崩す、正す、屈する、交える他。この句の「膝の笑ひ」は「膝が笑う」という膝に力が入らない状態を指す。作者は登山家だった。今でも山登りは数は減ったが続いていると聞く。山と言っても『百名山』に登場する山から小山まで限り無いが、この句の場合には後者だろう。山路を登っていると急に膝に力が入らなくなつた。「膝笑ふ」だ。何となく、我が身を振り返る作者。「山笑ふ」が見事だ。

三月やかなしびの海こゑもたず 諸岡 孝子

平成二十三年三月十一日、東日本大震災により、東北地方太平洋岸で、死者行方不明者約二万人という大災害が発生した。作者の住まいである宮城県気仙沼市も災害地の一つである。八年が過ぎた今、映像で見る被災地は、復興中の地域も多いが、殆ど手付かずの地もあるようだ。

この句、「かなしびの海こゑもたず」には、被災者の生

る月である。「三月や」に大自然の厳しさが潜んでいる。

三叉路のやさしき別れ春の闇 白神知恵子

作者は此の度体調の不良により退会することになり、その申し入れがあつた。長い間、岡山句会の指導に当たり、多くの新人作家が育つた。同時発表の、へ外に出れば病む身を急かす路の臺の句からも、病を抱え心急ぐ思いが出ています。通信欄に、「俳句関係の全てからの退会手続きも終えています」のメモが記してある。最近こういう例を時に見る。然し、一病を持ちつつ努力している人も多い。

この句、「三叉路」に、俳句と自身の病との思いが読みとれる。「やさしき別れ春の闇」が切ない。

臘梅や透かしてみたきわが余生 溝越 教子

作者は今年の三月号に「表紙絵の引き継ぎにあたって」と題する一文を載せている。一月号から山茶花の絵だ。従来の表紙絵にない単純なしかし存在感のある絵である。何よりも紅の花弁と緑の葉が活き活きとしている。

この句、「透かしてみたきわが余生」は、誰しもが抱く思いである。「わが余生」の今後は、幸、不幸、平凡の三つに集約されるが、徒に事を急ぐのは本来ではないだろう。「日は好日」こそが「余生」の幸である。

# 当月集

安立 公彦選



○ 中澤 弘

椿さく小庭の梢鳥帰る

佇めば談笑の石春うらら

春潮の隅田を下る伝馬船

辛夷咲くや書家ひたすらに墨をする

踏切の音を遠くに沈丁花

○ 近藤 真啓

踏むほどに縄文の土紀元節

たんぼぼやオランダ坂は雨の中

鉱泉の朝湯の余韻しじみ汁

靴底に土の弾力雨水かな

雨の日は雨のあかるさ花馬酔木

○ 山浦 紀子

手のひらに包む温みや蜆汁

ローションの肌になじむや春兆す

春宵やバンドネオンにタツプ踏む

麗かや英字レシピのスパゲッティ

老犬の尾の緩やかや春の夢

○ 横山 さくら

指で追ふ文字の薄さや花の午後

シャボン玉横目で競ふ高さかな

笑顔にも膨れつ面にも卒業歌

速達の届かぬ夕や花曇

透かし絵の懐紙の上の桜餅

○ 佐藤 まさ子

早春や靴音軽く煉瓦道

せせらぎの音をひろふや柳の芽

暖かや子供にかへる小半日

島椿遊覧船の賑はひて

藪椿一輪咲くや島の唄

# 春燈の句

安立 公彦選

山国や冬の花火に揺らぎある

千葉 池田 葉子

寒菊や歳月重ね佳き顔に

紅き実の総て消えたり二月尽  
休日馬塞の足許犬ふぐり

雪降らぬ国に生れて雪嬉し

手秤の仔猫に指をなめらるる

佳き年の始まる予感露の臺

老犬の頭をなづる落第子

凍て庭や鴉一声ありて寂

東京 山本 泰人

梅が香やつがひの鳥の枝渡り

五分刈の医師の眼光冴返る  
銀輪の追ひつ追はれつ草萌ゆる

街の灯の揺るる隅田や水ぬるむ

春寒や道に迷うて抜けられず

芽柳や糸をひきあゐる弱き雨

電線に鳩のくぐもる余寒かな

淡雪や沼に固まる鳥の影

東京 池上 昌子

諍うて縮まる距離やシクラメン

忘れ霜別れ惜しみつ未来坂

空港の通路に道を問はれけり

紙風船飛ばすりハビリ友の会

忘れ物気付きてよりの余寒かな

そびえ立つ白亜病棟風光る

家郷は坂道多し冬椿

兵庫 中上 馥子

伸び早くなりたる爪や梅ふふむ

卒寿の師母校に囲む桜餅  
神の田にさざ波の立つ蛸蚪の陣

千葉 東木 洋子

埼玉 大谷満智子

京都 西村 洋平

